

【読楽】034 「草津温泉往来」を読む *読楽箇所=本文全文

「草津温泉往来」の概要 *天保3年板



〈新板頭書・名所古跡・上州〉草津温泉往来

【作者】十辺舎一九作。三武青洲書(文政6年(1823)板)。柴松斎書(天保3年(1832)板)。

【年代】文政6年初刊。[江戸]西宮新六板。また別に、天保3年再刊、[江戸]森屋治兵衛板あり。

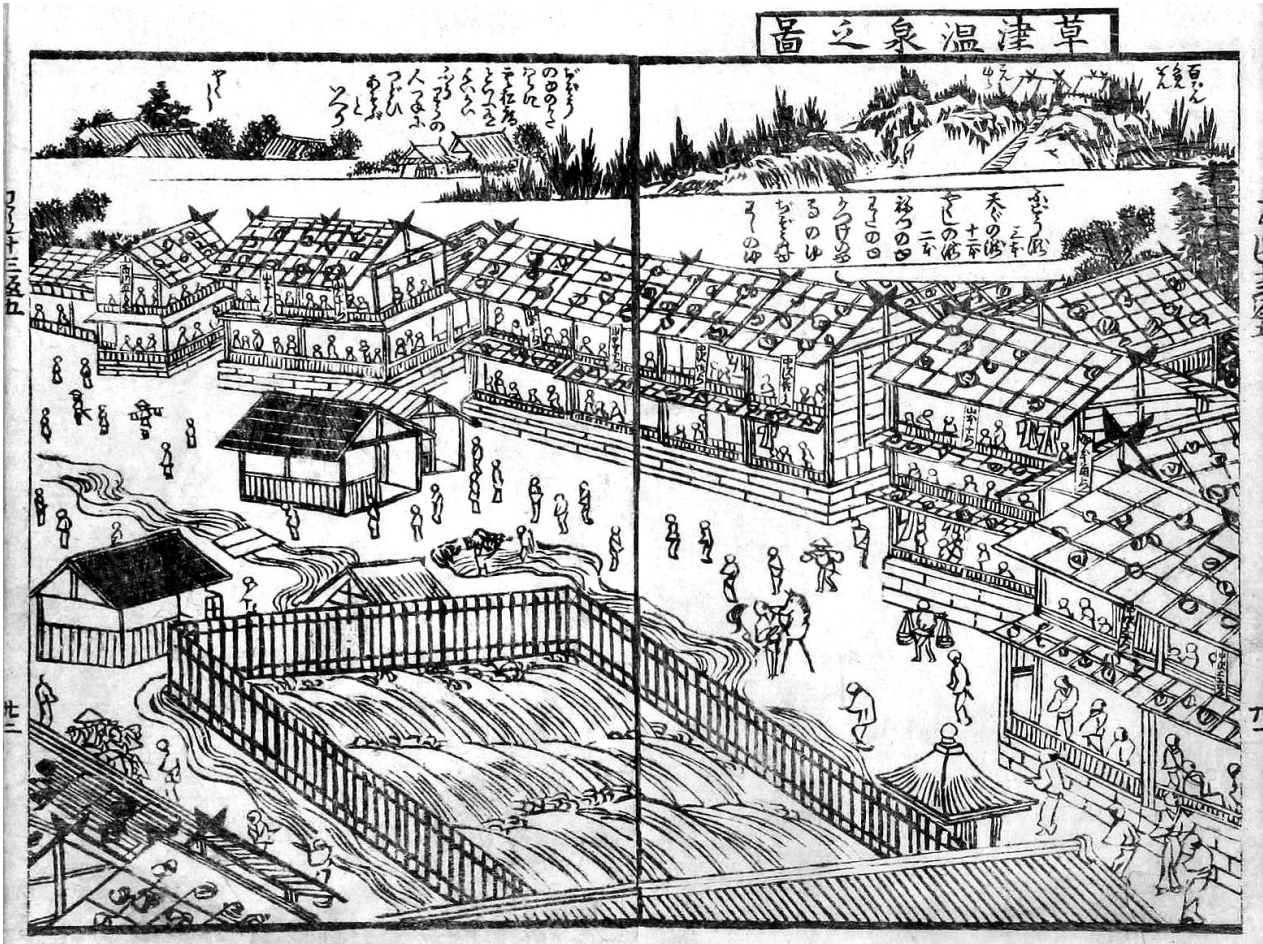
【概要】異称『〈上州草津〉温泉往来』。中本1冊。題簽に「〈上州〉草津温泉往来」、首題に「〈上州草津〉温泉往来」と記す。内容は、「五月雨漸晴て月の朗なるに、郭公の啼渡るより天氣麗敷打続ぬれば、いでや年頃願 儲し上州草津の温泉に赴ん迎、其催予にして立出たるが、東都を放れて板橋駅より中山道、高崎迄は諸方への紀行に数多見ゆれば、こは高崎より其往方をのみ著すべし…」で始まる手紙文形式で、高崎から草津までの行程と、草津の名湯・名店・旅宿等を紹介する。旅の醍醐味が「日毎に替行山川の佳景」と「其所の俚言方語(諺や方言)」にあると明言し、中山道高崎宿から草津まで沿道の名所にも触れ、目的地の草津については名湯・名勝から酒店・旅宿での食事・遊興等を詳述する。初板本の口絵「上州草津温泉繁栄之図」(再板本とは異板)には、「湯宿は全て3階建てで湯治客が多く、日本随一の賑わいで、6~7月がピーク」と記す。頭書には、草津温泉の沿革を略記した「温泉之濫觴」、付近の名所を示した「当所名勝」、草津からの各種ルート(志布越道・善光寺道・伊香保道・沓掛道・榛名道等)を記す「草津より諸方道法」、草津各湯の「温泉効能」や「入湯雑費」、湯宿で調達できる旅行者用の食品・日用品(当時の格安旅行は自炊が原則)を列挙した「商人売物」、氷餅・氷豆腐・湯晒し艾・絵図・挽物細工等の「当所産物」、さらに、温泉一般の泉質・効能に関する「温泉之次第」など、旅行ガイドブック並みの情報を満載する。

【所蔵】小泉・東大・玉川大・逋博・上田市図ほか。

【影印・翻刻】「稀覯往来物集成」31巻／「往来物分類集成」R48／「日本教科書大系・往来編」10巻。



草津温泉図(上=文政3年刊『方言修行』金草鞋)／下=明治15年刊『諸国温泉遊覧記(上州之部)』)



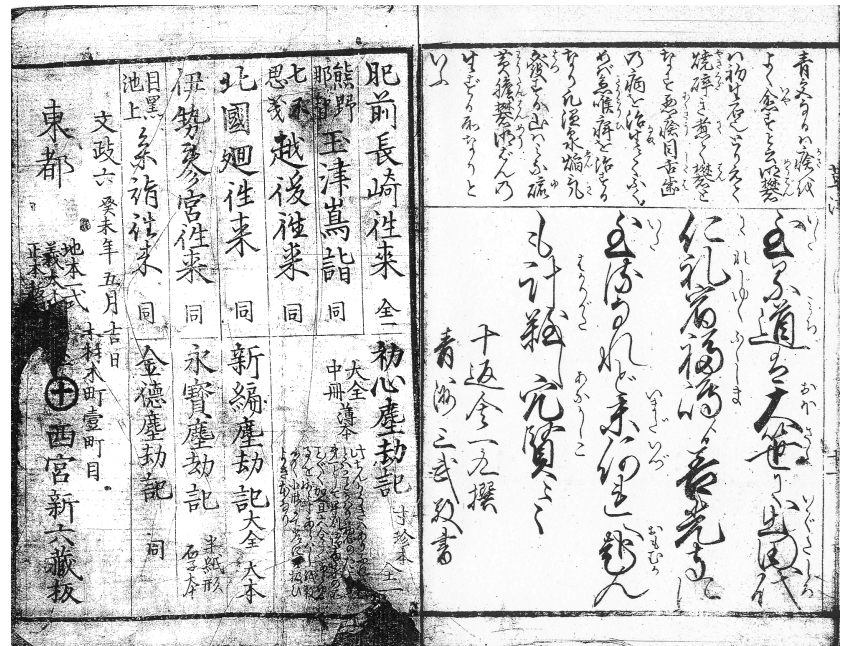
●旅情をそそる、旅行ガイドブック『草津温泉往来』

近世刊本の往来物を最も多く書いた人物は十返舎一九である。彼が初めて往来物を書いたのは享和2年(1802)、38歳の時で、その最初の作品が『手紙之文言』という用文章であったが、実はこの年に出世作『東海道中膝栗毛』が始まっている。一九自身は『膝栗毛』を1、2回で終わらせるつもりで書いたが、弥次郎兵衛・喜多八の滑稽な道中記は思いのほか好評を博し、以後毎年の恒例となり『東海道』8編のほか、さらに金比羅参詣・宮島参詣・木曾街道中・善光寺参詣・上州草津温泉道中・中山道中の『続膝栗毛』12編が文政5年(1822)まで続くという類稀なロングセラーとなった。

この20年間に一九は10点前後の往来物を著したが、そのほとんどが用文章であった。これらは、当時売れ始めた一九に目を付けた西村屋・鶴屋・森屋らの江戸書肆が書かせたものであろうが、江戸初期から多くの板種が見られるように「用文章」は往来物の中でも最も手堅いジャンルだから、一九の人気に期待しながらも、彼らはぬかりのない商売をしていたわけである。

その後、『膝栗毛』が幕を閉じた文政5年に、一九は『伊勢参宮往来』『大山廻富士詣』『金毘羅詣』『七湯廻文章』『戸隠山善光寺詣』『播州名所廻』、翌6年には『草津温泉往来』といった道中物の往来物7点を一挙に出版。その板元は全て江戸・西宮新六であり、この一連の地理科往来は『膝栗毛』の人気を当て込んだ西宮が一九に熱望して書かせたのであろう。一九は『膝栗毛』執筆のために各地へ取材旅行に出かけていたから、この手の往来も一気呵成に書き上げたと思われる。

文政5年3月刊『戸隠山善光寺詣』の巻末広告には、『肥前長崎往来』『七不思議 越後往来』『越中立山・加賀白山 北国往来』『熊野那智 玉津



島文章』『浪花名所文章』『目黒池上参詣文章』『奥羽名所往来』『金華山・塩竈 詣文章』『秋葉鳳来寺詣』といった未刊の往来物を列記するが、他の西宮板にもこのほか数々の道中関連往来物の近刊書目が見えるから、西宮は全国を歴訪した一九に各地を題材にした往来物を次々に書かせようとしたのであろう。

しかしその後、山口屋が一九を抱え込んだためか、西宮の計画は中断し、代わって、江戸書肆・山口屋藤兵衛から伝記型往来など合計24点(彼の往来物作品55点の半分近く)の往来物が文政6~8年に発行されたのであった。特に山口屋板の伝記型往来物は半紙板に色刷り絵題簽を付けた画期的な装丁だったから、一回り小さい中本の西宮板はいかにも貧弱に見えたに違いない。

このように一九の往来物の動向を見ていくと、人気作家の争奪戦が往来物の世界にも生じていたことを想起させるのである。いずれにしても、一九の地理科往来は『諸国名山往来』を除き、全て西宮新六原板であったが、その中から、『草津温泉往来』を採り上げる。

一九は文政2年刊『続膝栗毛』9編(善光寺道中)、同3年刊『続膝栗毛』10編(上州草津温泉道中)の取材のため、文政元年4月から8月までの約4カ月間に江戸~高崎~小千谷~新潟~新津~出雲崎~高田~赤倉~善光寺~草津~高崎~江戸のルートで旅行している。従って、『戸隠善光寺詣』や『草津温泉往来』にはこの時の取材メモが活用されたはずである。これらの往来には『続膝栗毛』の如き滑稽味はないが、興味深い記述や実用的な旅情報が随所に見られる。

さて、『草津温泉往来』は次のような文章で始まっている。

五月雨 漸 晴て月の 朗 なるに、郭公の啼渡るより天氣麗敷打 続ぬれば、いでや年頃願 儲上州草津の温泉に 赴 んと、其 催 予 にして立出たるが、東都を放れて板橋駅より中山道、高崎迄は諸方への紀行に数多見ゆれば、こは高崎より其往方をのみ著すべし...

一九が文政元年に江戸を立ったのは4月16日というから、本書の季節とほぼ同じ頃である。そして、上記に続いて、旅行の醍醐味を「抑 旅行の慰とするは、毎そそもにい替行山川之佳景かわゆくさんせんに愛あつ、其所の俚諺・方語も異なるのげん ほうごに移行こそ面白うづゆくけれ」と簡潔に述べている。

さらに、草津温泉までの行程を簡単に紹介する。…高崎を通過し、右に越後街道へ分岐する横町を過ぎると、今度は東の三国街道、伊香保・吾妻道と西の榛名・草津道の分かれ道である。そこから草津方面へ進むと程なく室田の宿に至るが、ここから1里余り東の白岩は十一面観音で有名な板東順礼札所である。さらに行くと、榛名への分かれ道があるが、約1里余りで榛名山権現に着く。別当を般若院といい、その靈験あらたかなことから参詣客が絶えない。そこから、三の倉を越えて山道を上り下りすると、大戸宿に到着する。ここには牡丹酒という名産品があるので、これを吹筒すいづつ(竹製の水筒)に入れて行く。しばらくすると関所に出るが、関所も閉ざさぬ平和な世の中なので私のような一人旅の者でも無事に通してもらえる。さらに付近に「鳩の湯」がある菅尾を経て坂道を中程まで行くと、左は信濃路へ続く道、右は峠の茶店に出る道を右に行きそこで一休みする。そこからの眺望は、「見渡せば浅間山の煙、空に棚引たなひき、地蔵が獄の雲、腰に横たはる。六里の原足下に霞かすみ、塩沢の山目前あざやかに鮮あざやかなり」という具合に実に素晴らしい。そこを下って長野原の橋に出ると、眼下の「谷川の翠、怪岸に砕くだて玉を散す光景ありさま」はまさに壯観の一語に尽きる。そこから2里東に「川原の湯」がある。また羽根尾道は西に1里余りである。そして原山を越えて草津の入り口、新田町・立町に入り、さらに中町の末の黒岩に宿をとる。しばし休息した後、いよいよ草津温泉めぐりである。

まず「滝の湯」は不動の滝・天狗の滝・薬師の滝など17の滝があり、そのほか「御座の湯」「綿の湯」「熱の湯」「鷺の湯」「地蔵の湯」などの名湯が連なる。山上には薬師堂、百庚申、金毘羅の宮があり、山麓の酒店「桐屋」にはにぎやかな客でいっぱいである。山中だが生簀いけすに鮮魚を飼っているので、難波屋・美濃屋といった店では鮮魚料理も楽しめる。このほか、美女に矢取りをさせる楊弓ようきゅう(遊戯用の小弓)や吹き矢などの遊戯、また名人の軍書講釈おとしばなし・落おとしもなかなか面白い。

さて、草津からの帰路には沢渡方面と善光寺方面へのルートがあるが、まだどちらへ行こうか決めかねている。穴賢々々

—『草津温泉往来』は以上のような内容であり、『続膝栗毛』よりもはるかに簡単な記述である。だが、わずか11丁(22頁)足らずの小冊子ながら、一九は草津温泉のあらましを紹介しようと口絵や頭書などに様々な記事を載せている。

文政板の口絵「上州草津温泉繁栄之図」には同地の温泉街風景を描いて、「湯宿は多く、みな三階建てで湯治客が多く、大変な賑わいで、特に六～七月がピークである」と説明するほか、頭書にも、草津温泉の沿革を記した「温泉之らんしゅう濫觴」、付近の名所ガイドである「当所名勝」、草津から志布しぶ越道・善光寺道・伊香保道・沓掛道・榛名道など各種ルートを紹介した「草津より諸方道法」、草津各湯の効能を示した「温泉効能」や「入湯雑費」、湯宿で調達できる旅行者用の食品・日用品(当時の格安旅行は自炊が原則)を列挙した「商人売物あきんどりもの」、氷餅こおりもち・氷豆腐こおりどうふ・湯晒ゆざらし艾もくさ・絵図・挽物細工等の「当所産物」、さらに、温泉一般の泉質・効能に関する「温泉之次第」など、旅行ガイドブック並みの記事を満載する。

中でも興味ひかれるのは「入湯雑費」で、「宿代(諸道具使用料を含む)1人333文、夜着(1週間)300文、蒲団(1週間)250文、水揚代42文」と具体的な料金を記載しており、本書は大人の入湯の予備知識にも役立つ実用性も備えていた。この数字が草津温泉旅館の平均的な料金体系と思われるが、遊女を呼んで遊ぶ費用(水揚代)を省いたとしても、1泊だけなら883文(1文=20円として、約1万8000円)、数日間の滞在なら1泊につき約412文(約8200円)ということになる。裏長屋の住人なら1両(約8～10万円)で1年間暮らせたという(今井金吾『江戸の旅風俗』)から、草津温泉では派手な遊びをしなくても10日足らずでその金額を費やすことになったわけである。

従って、板元というスポンサーでも付かない限り、一九のように長期の旅行を何度も行うことは、一般庶民には困難だったであろう。その旅の醍醐味や雰囲気存分に伝えるべく書かれたのが、一九の地理科往来であった。これらは、めったに旅行できない一般庶民にとって、バーチャルな旅を体感できる、手頃で魅惑的な旅行ガイドだったと言える。



